【要旨】

行基説話の研究―宝誌伝との比較において―

社会システム研究科　文化・言語専攻
二〇一九M四三〇〇二　村田愛実

本論文では、奈良時代の僧行基（六六八～七四九）と中国六朝時代の僧宝誌（四一八～五一四）を比較し、行基の説話形成に影響を与えた可能性について論じる。行基は、『続日本紀』天平勝宝元年（七四九）二月丁酉条にあるように、多くの霊異を現した菩薩の化身として尊敬されていた。一方で宝誌も、『高僧伝』巻十釈保誌（宝誌）伝に多くの神異譚を残しており、菩薩の化身であることが知られていた。一見して上記二点の共通項しか見受けられない両者であるが、各説話を見ていくと類似する説話が複数見られた。

第一章では、類似する説話のひとつとして魚食説話について論じた。まず行基魚食説話の初出とされてきた『日本往生極楽記』と、『扶桑蒙求私註』に引用される佚書『日本名僧伝』を比較し、両者が非常によく似通っていることから、延喜十四年（九一四）成立とされる『日本名僧伝』が行基魚食説話の初出と推測した。次に、宝誌魚食説話については、初出の『高僧伝』では宝誌が去った後に膾が魚へと変化しているが、『法苑珠林』で「致」飽乃吐。」と誤写されて以降、行基魚食説話と似た説話構成が定着している。また、先行研究に指摘されているように両者とも同時に二か所に存在する分身説話を有していることからも、かつて中国の高僧伝を本朝の高僧伝に取り入れようとした動きが存在していたことを示していると考えられる。

第二章では、両者の共通する出生譚として鷹の攫い子説話を取り上げた。まず、宝誌出生譚の初出である『石門文字禅』の日本伝来について論じた。『一山国師語録』や『知覺普明國師語録』『塵荊抄』などの禅籍に宝誌出生譚が見えることから、鎌倉末期～室町時代には宝誌鷹の子説話が禅僧によって共有されていたと推測した。行基出生譚については、『天龍開山夢牕窓正覚心宗普済国師年譜』の鷹の攫い子説話の他に、『三国伝記』行基伝に類似する説話が見えた。また、いずれも行基の代表事業である四十九院の建立と併せて記載されていることから、室町時代には行基鷹の攫い子説話が重視されていた可能性が考えられる。あそして、『行基菩薩伝』『沙石集』『行基大菩薩行状記』の行基出生譚の変遷を検証し、異形出生、樹上・（泣き）声での発見、優れた容姿への言及など、徐々に宝誌出生譚と似た構成に変化していた。これらの共通項により、行基鷹の攫い子説話へと変化し禅僧間で共有されたと考えられる。

第三章では、長谷観音と行基・宝誌の関係性を取り上げた。行基が開眼供養導師を務めたと知られる長谷観音（十一面観音）を、宝誌が通力をもって三千世界を見渡した際感銘を受けたとする説話が『長谷寺験記』に収録されている。宝誌十一面観音化身説を長谷寺が本尊を称揚するために利用した可能性について論じた。『延暦僧録』戒明伝にみえるように、宝誌十一面観音化身説は戒明が在唐した大暦九年（七七四）には留学僧に伝わるほどには流布

していたと考えられる。また、宝誌には顔面を割り開いて真身を示す説話が『仏祖統紀』に見られ、その説話を元にしたと考えられる宝誌像が大安寺に存在していたことが『七大寺巡礼私記』に見える。当該説話によく似た説話が『打聞集』『宇治拾遺物語』にも見え、それら説話集の「原拠」に近い文献とされる『宝誌和尚伝』には、宝誌の真身が不空羂索・十一面観音・千手観音の三つに見えたと記される。これらのことから、十二世紀には宝誌が顔面を割り開いて真身を現わした説話が流布していたと考えられる。また、『長谷寺流記』の成立が『江談抄』以降とされることから、十二世紀には宝誌伝が広く知られており、宝誌の真身と同じ十一面観音である長谷観音を称揚するために長谷寺縁起に取り込んだと考察した。

本研究を通して、宝誌伝が日本にもたらされたのは、『高僧伝』あるいは『法苑珠林』請来時と、仁安二年から弘安二年の入宋僧激増期の大きく二つに分けられると考察した。特に後者については、新たな宝誌伝が請来され始めたことによって、日本において宝誌伝が流行したと考えた。菩薩の化身としての宝誌像が広まることにより、同じく菩薩の化身として名高い行基の姿が重ねられ、本朝の高僧行基を称揚するために異国の僧宝誌の伝承を行基説話に取り込んだのではないかと考える。